

藤村とクロポトキン『田園・工場・仕事場』

瓜 生 清

(平成九年九月四日 受理)

はじめに

藤村は生前に六冊の感想集を刊行している。その内三冊が、明治三十九年から大正二年にかけて住んだ浅草新片町、大正七年から晩年にかけての麻布飯倉片町の居住地にちなんで、『新片町より』(明42・9 左久良書房)『後の新片町より』(大2・4 新潮社)『飯倉だより』(大11・9 アルス)の書名で刊行されているのは周知のことである。前二冊を合本した『浅草だより』(大13・9 春陽堂)の書名の場合も同様である。これらの感想は、日々の生活や折に触れての見聞に胚胎した思索を、「一種の通信」(『新片町より』序)として読者へ送られていたと言っても間違いない。藤村文学に対して、しばしば近代の理念を日本人の生活意識・論理そのものに密着しながら考察しようとしているという評価が与えられる。昭和五年に刊行された第五感想集『市井にありて』(昭5・10 岩波書店)の書名は、このような信条が終始一貫

させられた基本方針であったことを雄弁に物語っている。藤村は、前記『新片町より』の「序」において、自己の存在証明を小説家等の「専門家」であることによって主張する過剰な職能意識を批判し、市井に生きる「人」の視点から近代の精神を問い続ける強い意欲を表明している。この序文は、藤村の生涯を貫く独自の思念の結実を証する指標的な事柄として極めて注目するに値する。本論では、浅草新片町時代の藤村の思想形成に、クロポトキン『田園・工場・仕事場』(二八九八[明31]年)が影響していたことを、友人木村莊太の回想資料に着目しながら考察する。

(一)

明治三十八年九月、山口孤剣・中里介山等と雑誌「火鞭」に結集し、旧来文学を革新する旗揚げをした白柳秀湖は、「ゼ、コンクエスト、オブ、ブレット」を読む(「読売新聞」明42・2・14)において、初志に

適う思想上の先行者をクロポトキンに見出す思想的経過について回顧している。クロポトキンの科学的思索力と人間の個性を根底として説かれる無政府的共産主義のヴィジョンへ開眼したことにより、当代文学につのらせなければならなくなった激しい忿懣が熱っぽく説かれている。ここで興味深いのは、「火鞭」時代の革新熱をより過激化させていた白柳が、その眼鏡に適った当代文学の作家に藤村を挙げ「私は『春』の著者が好きだ。」と述べていることである。かつて「なぜ、藤村の詩と小説とは僕の社会的思弁とあんなにたやすくあんなにきれいに融合することが出来たのであらうか。」と思想的血縁の所以を自問した白柳秀湖の回想「藤村氏の詩及び小説と初期の社会主義運動」の問い掛けに触発され、平野謙が『「破戒」を繞る問題』(「学芸」昭13・11)において、『破戒』(明39・3)評価の偏向を作品の社会性を正当に評価することによって正そうとした独創的な論を打ち立てたことは、いまさら縷説するまでもないであろう。平野に『破戒』の読み直しを目論ませる機縁になった上記の回想は、白柳秀湖の「社会的思弁」の形成にクロポトキンの思想が影響していたことを想起すると、明治四十年代、藤村がクロポトキンの思想に強い共感を示していたことを裏書きするのではなからうか。

さて、熱烈な藤村心酔者と言っても過言ではない木村莊太の回想に、藤村とクロポトキンの深甚な関係を暗示した興味深い資料がある。雑誌「人間」(大10・4)の特集号「諸家の眼に映じたる人及び芸術家としての島崎藤村氏」に寄稿したエッセイ「島崎さん」と、出版を目前にして自殺した木村の遺著『魔の宴』(昭25・5 朝日新聞社)の文章である。以下、引用が長くなるが、問題の所在を明らかにするため「島崎さん」『魔の宴』の順に引用する。なお、引用本文の傍線は稿者が付したものである。改行の箇所は／の符号で示す。

① まだ奥さんがゐられた時分だつたと思ふ。二度目にお訪ねした時の気がする。島崎さんは下で障子を張つてゐられた。／その時二階で島崎さんは手仕事の話をされた。／『障子を張るとか、原稿紙を刷るとか、剃刀を研ぐとかいふやうなことは、何となく人の心を静かにさせるものですね。原稿を書いて疲れた時なんかやると中々いゝものです。』といはれた。／この言葉も長く覚えてゐる。／その後、私は島崎さんから、クロポトキンの『田畑・工場、及び仕事場』をお借りして読んだ。／それをお借りする時に、『この本を読むと、広いところへ出るやうな気がする。』といはれた言葉も覚えてゐる。(島崎さん)

藤村氏とは、ある日、こんな話もした。(中略)「障子を張つたりなにかする、手の仕事というものはいいものです。」と藤村氏は、故意か自然か、自分のことに関わる話をそらすようにして、「手の仕事は心を静かにさせるものです。私は原稿紙も、木版で、いま自分で刷つて見えています。頭の仕事と、手の仕事。これを読んでいなかつたら、読んで見てご覧なさい。」／そういつて、藤村氏はかたわらに身を延べて、室の隅にあつた、本箱代りにしている袋戸棚の戸を開けて、薄い一冊の洋書を取り出した。／出された本は、思わぬクロポトキンの「農場、工場、仕事場」で、藤村氏からは、その最後の「頭脳労働と手工労働」の章を特に読むようにといつて勧められた。／「これナゾ読むと、広いところへずつと出て行くやうな気がします。」といい添えられて。(『魔の宴』)

この証言内容は、藤村とクロポトキンの『田園・工場・仕事場』との

関係、とりわけ第八章「精神労働と肉体労働」との結びつきとは一体何であるのか等、新片町時代の藤村に最も接近した知友が伝える直話として興味をかき立てるものがある。管見によると、藤村がクロボトキンの『田園・工場・仕事場』の書名を挙げて言及した資料を見いだせない。藤村が、一九二二年(明45)版の“Fields, factories, and workshops: or, Industry combined with agriculture and brain work with manual work.”を架蔵していたことは、『島崎藤村資料目録(日本近代文学館所蔵資料目録13)』(昭60・4)の記述によって知られる。筑摩書房版『藤村全集』別巻(昭46・5)の「蔵書目録」にも該本について簡略な記載がある。木村は『田園・工場・仕事場』を貸し与えられたのは、藤村の妻冬子が在世中の頃であつたと回想している。冬子の死は明治四十三年八月六日であるので、この架蔵本は、木村が貸与されたものとは別本で、のちに入手されたものであろう。

藤村とクロボトキンとの関係について検討を始める前に、木村の回想がどの程度資料的に信を置くことが出来るのか、二人の交友の実態から吟味をしておかなければならない。藤村が木村について言及した資料は少ない。明治四十二年六月二十六日開催の「龍土会」の集まりに木村を同行した記述が見える日記風のエッセイ「浅草にて」(『文章世界』明42・8)や、大正元年十一月二日に死去した第二次「新思潮」の同人犬貫晶川の葬儀に木村と参列したことを記した追悼文「若き晶川の死」(『文章世界』大元・12)を数える程度に過ぎない。しかし、木村側の資料は比較的豊富であり、明治三十九年藤村が浅草新片町に転居してからの親密な交際を振り返りながら、大正二年渡欧する藤村に衷心からの答礼の心情を吐露した送別の文章「新片町を去る著者に」(『後の新片町より』に付載)や、藤村から受けた厚情を細大漏らさず語っている前記

『魔の宴』等で、交友の実態を詳細に把握する事ができる。先走って言えば、木村は新片町時代の藤村を親愛と傾倒の思いを抱いて足しげく訪ねた若き文学青年の筆頭格であつたのである。機微に渡つた木村の証言は、両者の親交の深さから判断して十分注目に値するであろう。

ところで、木村の二つの回想は、叙述に精粗の差が歴然としているが、多くの点で共通する。しかし、「手仕事」についての話題と『田園・工場・仕事場』を読むよう貸与されたのが同日の出来事であつたのか否かに、重大な食い違いが見られる。より具体的な記述を行っている『魔の宴』にも、クロボトキンの大部の著書を「薄い一冊の洋書」であつたと述べている所など、資料的価値に疑問を感じさせる不審な点がある。しかし、木村がクロボトキンに出会つて人生上の転機を自覚させられ、クロボトキンから受けた感化を後半生の農業従事において情熱的に実践していった事実から判断すると、この証言の内容が信の置けない妄誕であつたとは考えられない。例えば、木村はエッセイ「三つの本」(『新潮』大5・10)において、自己覚醒に影響した本として、クロボトキンの「無政府主義者の道徳」を挙げている。そして「クロボトキンに自分の性向に適する道徳説を学んだといふべきでした。」とまで言い切り、クロボトキンの影響の絶大さを強調しているのである。^(注5)その後、木村は大正七年「新しき村」の実践を開始した武者小路実篤と日向へ土地選定に同行するが、武者小路との感情の疎隔、「新しき村」内部に生じた人間関係の軋轢などの理由から、間もなく離村するに至つた。しかし、大正十二年の関東大震災を契機に千葉県下総の農村に入植し、自給自足の農業生活に本格的に乗り出す。帰農後のエッセイを集成した『晴耕雨読集』(昭9・1 春秋社)にも、クロボトキンの感化が強く持続していることを窺わせる資料が散見しているのである。木村の思想形成の跡を辿

れば、彼をクロボトキン心酔者の一人であったと評してもけつして間違いないのである。木村とクロボトキンの結びつきの強固さと思うと、木村が藤村に読むよう勧められた『田園・工場・仕事場』についての証言は、細部においてはともかくも、大綱において信憑性があると判断しても間違いではなからう。

(二)

『魔の宴』は、『島崎さん』の文章からは三十年経過した昭和二十五年に刊行されている。後年の回想であり盲目的に寄りかかることは禁物であるが、看過したい詳細な記述が行われている。『魔の宴』の前書には、生涯の総決算を目指した自叙伝について、出来るだけ「詩」の自己弁明を避け、「真実」の書を残さんとしたという言揚げがされている。複雑に絡み合った異母妹との数奇な恋愛や、伊藤野枝とのセンセーショナルな恋文公表事件等の記述には、「詩と真実」の問題が隱微にまわりついていたかもしれないが、敬愛する藤村の回想に意図的な歪曲が行われたとは考え難い。しかし、通常回想資料につきまとう事実関係の正確な証拠物件たりえているか否かの危うさは、藤村を回想する叙述においても避けられないのである。『魔の宴』の上記引用部分は、目次に記された年時によると、「一九〇七年」(明40)の出来事になっている。しかし、ここには明治四十二年六月開催の「龍土会」に藤村と出席した記述が含まれており、明らかに記憶の錯誤が指摘できる。前述のように『田園・工場・仕事場』が大部の書物でありながら、「薄い一冊の洋書」と述べている不可解な箇所もある。さらに、前記の「島崎さん」に比べて、一代記の出来事をより髣髴と伝えている『魔の宴』の生彩に富む文章に、文飾に傾いた物語化の不自然さが拭えないように思わせることも

否めないのである。クロボトキン受容の実態について考えていく場合、大正十年に発表された「島崎さん」の方を基本にして論じていくべきであらう。

ところで、『魔の宴』によると、藤村はなぜ木村に第八章「精神労働と肉体労働」の箇所を熟読するように念を押したのか。若き日の木村は父が一代で築いた資産に寄生する生活を続けていた。額に汗する労苦を知らず、奢侈と飲楽に耽溺する若き蕩児を前にして、藤村の談話が、おのずとより良き生活へ善導しようとする教訓調を帯びるのは当然であったであらう。「手仕事」の積極的意義を強調することが、有閑を持て余す享楽家に自省させる効果があると考えた為とも想像される。そうすると、「広いところへずつと出ていくような気がします」という感想は、藤村のクロボトキン理解の全てを凝縮した考えであったとは確かに断定できないであらう。しかし、後述するように、「手仕事」の意義の強調、「専門家」を偏重する弊害の指摘、過度の「分業」を推進することによって近代社会が直面している自己喪失等、藤村が問題にあげている論点との関連で、この語句には、藤村の読後感を集約した基本的な理解の仕方が込められていたと推測できるであらう。

以下、前記「人間」に掲載された「島崎さん」の引用文の傍線部を中心に、①木村が訪問した年時、②「手仕事」への愛着について、③藤村とクロボトキン「田園・工場・仕事場」との関連性について、④「広いところへ出るやうな気がする」と語った藤村の基本的理解の仕方について考察していく。なお、「人間」掲載文によると②と③の項目は並列的に書かれ、相互に強い関連性があるようには述べられていない。しかし、『田園・工場・仕事場』の内容から推測して、『魔の宴』の記述どおり両者を関連づけて考察していくのが至当であらう。

回想によると、木村は妻冬子在世中、藤村宅の二階を訪ねたことになっている。訪問時期は、藤村が浅草新片町の二階建ての借家に転居した明治三十九年十月二日以降、冬子が急死する明治四十三年八月六日の間のことになる。木村の前記「新片町を去る作者に」にも、「始めて私があなたに御目に掛つたのは、もう足掛八年の昔になります。(中略)まだ郊外から下町へ移つて来られたばかりの新居を突然に御訪ねしたのが、今私のあなたに結ばれてゐる御交宜を得る始めでした。」と書かれており、木村が浅草新片町転居後に訪れたことは間違いない。しかし、エッセイ「島崎さん」の回想文に徴しても、クロボトキンが話題になった訪問時期をこれ以上特定するのは困難である。

そこで、『魔の宴』と藤村側の資料とを批判的に検討することによって、いまだし時期の限定について拘泥しておきたい。先に引用した『魔の宴』の文章の前には、訪問時期の特定に係わる事柄として、木村はその時すでに小説『春』(明41・10)を読了していたと述べている。続けて、明治四十二年六月、あなご料理で名高い鮫洲の川崎屋で開催された「龍土会」へ藤村に誘われ、散会後の帰途、藤村・小山内薫を見送りかたがた浅草橋まで同道した一日の交歓が詳細に述べられている。『魔の宴』のこの件は、前記の日記風のエッセイ「浅草にて」に記された明治四十二年六月二十八日の「龍土会」の記述と完全に一致する。そうすると、クロボトキンの話題に関連した訪問時期は、『春』が刊行された明治四十一年十月十八日から、「龍土会」が開催された明治四十二年六月二十八日の間のことであつたのではないか。この推測は、「ルウソオの『懺悔』中に見出したる自己」(『秀才文壇』明42・5)にクロボトキンと関連づけて「専門家」の偏重・「分業的名義」に縛られた思考法などを批判した発言があり、明治四十二年九月二十二日に刊行された『新

片町より』にも、教育界に浸透する分業制度の欠陥に言及したエッセイ「教育の分業法」が所収されていることで裏付けられるのではないか。つまり、この時期、近代の資本主義経済が強く押し進めた分業システムの弊害を厳しく断罪したクロボトキンの『田園・工場・仕事場』に影響された論理展開を示したエッセイが目立っているからである。木村に『田園・工場・仕事場』を読むように勧めたのは、『春』刊行後から明治四十二年の間、その時期をさらに踏み込んで推測すると、上記「龍土会」が開催された六月前後ではなからうか。

ところで、藤村はどのような理由でクロボトキンの『田園・工場・仕事場』に傾倒することになったのか。その機縁について木村の回想は何も伝えていない。藤村の「クロボトキンの自伝」(『太陽』明42・7)によると、『ある革命家の手記』(一八九九年)を必見の書であると熱心に説いたのは友人中沢臨川であつた。臨川の「小是非」(『読売新聞』明42・1・24)は、雑誌「十九世紀」に発表されたクロボトキンの「最近科学」を例に挙げ、他に比肩する者のない該博な知識と、文学・科学を問わず偏狭さのない主義の立て方に感嘆した文章を書いている。藤村が『田園・工場・仕事場』に示した強い関心は、臨川の教導に影響されたところがあつたかも知れない。しかし、『ある革命家の手記』の場合と異なり、臨川が機縁に直接関与したか否かは、目下のところ不明である。

興味深いのは、明治四十一年一月治安警察法違反に問われ、軽禁固一か月半の刑を受けて入獄した堺利彦が、獄中で書いた小説「白頭の恋」(『楽天四人』所収、明44・6 丙午出版社)である。堺は、土に情熱を燃やして来た仮名の農学者宮川慶作に、全ての人間が平等に肉体労働をおこない、その余暇に楽しむ「頭の労働」によって精神が充足させられるような理想的な社会を夢想させている。小説では、宮川がクロボト

キンの「本」に興味を引かれた理由について「僕は曾てクロボトキンの本を読んだ事がある。クロボトキンといふ奴、中々学者で、色々な科学の知識を持つてゐる。僕は矢張り農学の関係からチヨイト彼奴の本を見た」と述べているだけである。堺は検閲を恐れたのであろうか、「本」と言っているだけで、『田園・工場・仕事場』の書名は明示していない。しかし、「白頭の恋」の内容から該本を指していることは間違いない。農業改良に注いだ宮川の学究的情熱が、『田園・工場・仕事場』と出会うことを契機に、精神と肉体をともに生かす理想の共産社会を夢想させるまで高められていく設定は、いかにも社会主義者堺らしい目のつけどころである。

新片町転居直後、中央文壇に進出しようとする質実な決意を「京に田舎ありの主義」の語句で伝えた神津猛宛書簡(明39・10・16付)、その理念を詳述した「江戸趣味と田舎趣味」(『学生タイムス』明40・2)などで明らかのように、藤村が小諸で見聞した農村生活の感化を、意識的に都市居住者の直面する諸問題に対置しようとしていたことも周知のことである。そうすると、クロボトキンの『田園・工場・仕事場』との出会いは、小説「白頭の恋」の農学者宮川慶作の場合と同様に、藤村に底流している農村・農民への強い志向性が端緒となつて生まれたと推測してもけつして不穩当ではあるまい。

(三)

『田園・工場・仕事場』は、第一版の序文にあるように「十九世紀」・「フォーラム」誌に発表された諸論稿に加筆訂正を加えて一八九八(明31)年に刊行された。クロボトキンの代表的著作である。内容はアダム・スミスの分業論を批判した第一・二章(工業の分散)、ロバー

ト・マルサスの過剰人口説の理論を批判した第三・四・五章(農業の可能性)、小規模の仕事場と大規模の工場との共存を説いた第六・七章(小工業と工業村落)、磯谷武郎氏(『田園・工場・仕事場』「アナキズム叢書 クロボトキンⅡ」)が本書中「最も生彩に富む部分」と評している「教育哲学」を提唱した第八章(精神労働と肉体労働)、第九章(結論)及び付録の構成をとっている。私見によると、藤村と『田園・工場・仕事場』の関係で最も注目すべき所は、第一章のスミスの分業論を批判した論旨と、木村が熟読するよう勧められたと証言している第八章「精神労働と肉体労働」であろう。本書の内容全体については、前記磯谷氏の解説に譲り、上記の二つの章を中心に内容を略記する。

第一章の主要モチーフは、人間の能力と自由を阻害する分業制度への激しい批判である。スミスの『諸国民の富』が提唱して以来、「分業」は生産性と利潤の名のもとに人間の機能を分割して止まない合言葉と化した。つまり、肉体労働者と知識労働者、農業労働者と工業労働者へと取り分け大多数を占める工業労働者に際限のない分割が押し進められ、それは個人に止まらず、諸国家間の産業を分業化するまでに拡大が続けた。しかし、個人の労働が、生涯機械の奴隷のような単調かつ退屈なものになるのに比例して、自分の労働を変え、自分の全能力を発揮しようとする要求がますます顕著になった。この要求は、一国内の各地域間、さらには諸国家間の一切の分業体制への拒絶と連動する。このような必然的趨勢から「機能の一时的な分割が分離した各事業を成功させる最も確実な保証であるけれども、際限のない分割は消滅し、個人の異なった能力、すべての人間集団のなかでの能力の多様性に相応するさまざまな仕事——知的、工業的、農業的——にとりかえられる運命にある。」と断定する。そして、労働の分割ではなく合成によって可能になる理想の

社会が次のように説かれる。「この社会は、各個人が肉体労働と知識労働の生産者であり、健康な各人が労働者であり、各労働者が田園においても工業的な仕事場においても労働し、さまざまな天然資源を十分に処理しうる個人のすべての集団——それが国家であらうと、あるいはむしろ地方であらうとも——が自分自身の大部分の農業および工業生産物を生産し、自分で消費する社会である。」と。

第一章において、工場と田園の労働を結合する変革された社会は、そのために必要な方法として「合成された教育」、つまり科学的知識と仕事の知識を結合した人間の育成によって実現されると述べている。これを詳述したのが、第八章「精神労働と肉体労働」である。かつて、科学者は肉体労働と手工を軽蔑しなかった。手工は理論の豊かな母体であったからである。他方、昔は労働者も専門化しない仕事場で多種多様な労働に刺激を受ける知識の主体であり得た。それが、分業によって、精神労働者と肉体労働者に分断されたのである。際限の無い分業によって専門化された労働者は、当然創意と知的関心から遠ざかることになる。このような分業のもたらした弊害を打破するために、つぎのような「合成された教育」の必要性が力説される。「私たちは知識の専門化の必要性を十分に認めるが、専門化が一般教育の後につづき、一般教育が科学と手工で同じようにおこなわれねばならない、と主張するのである。私たちが精神労働者と肉体労働者への社会の分割に對置するのが両者の活動の結合である。そして、精神労働と肉体労働との現在の分割の維持を意味する『技術教育』ではなく、あの有害な差別の消滅を意味する合成教育、すなわち完全教育を私たちは主張するのである。」一切の分業の終結によって、肉体と頭脳の多面的能力を結合させた人間の全体性が発現できると説くのである。そして、人間の本性を最大限に生かす社会は、

どのような職業を選ぼうと、生活の一部となった日常の労働によって人間性と接し、富の特権なき生産者である自分自身の義務を履行することを知って満足する人によって維持されるのである。その他、精神労働者が書架に囲まれた書齋にいて俗世間から超然とし、肉体労働者を侮蔑しようとするかぎり、近代工業の揺籃期の労働者の特徴づけた天分の高揚を決して回復することはないであらうと痛罵していることも見逃せまい。

さて、『田園・工場・仕事場』と藤村との接点を明らかにするために、その前提として、藤村が近代社会が推進する過剰な「専門化」の趨勢に懐疑を深めていたこと、生来持っていた「手仕事」への愛着心等を、思想的に問い直す過程について整理しておく必要がある。藤村は前記『新片町より』の「序」において、「吾儕は『人』としてこの世に生れて来たものである。ある専門家として生れて来たものではない。」と力説している。新片町時代の思索を凝縮した表現であると見なして差し支えあるまい。前記の雑誌「人間」の「諸家の眼に映じたる人及び芸術家としての島崎藤村氏」と銘打った特集号は、例えば『近日本文豪評伝叢書』(大6-17 新潮社)が『人及び芸術家としての国木田独歩』を皮きりに、尾崎紅葉など同一の書名で続刊されて名高いように、かつて作家の個性的な風格と芸術を総合して論評する場合しばしば使われた呼称である。これら大正期の人格主義の浸透を想起させる用語例と比較して、『新片町より』の「序」で「人」であることの肝要さを強調した表現に異質なニュアンスを感じ得るのは単なる思い込みであらうか。

近代化の実効を挙げるためスペシャリストを重用した明治社会において、「専門家」という言葉は、欧米の最新知識に通曉した有為な人材を指し、社会的に強固に支持を受けた価値観念と同義であった。藤村は専門家である前に一人の「人」であることに固執し、自己のアイデンティ

ティを特定分野に卓越した能力で考えることに厳しい眼を向けたことに特色がある。衣食のために選択した職業やそのために必要な専門的技能が、自己の存在証明と化していく社会一般の方とは類を異にしている。藤村は、上記のような社会的趨勢を意識しながら、文学においても専門意識の偏重が柔軟な発想を硬直化させる危険性を秘めていることを指摘し、束縛を受けない「自由」な精神の働きが肝要であることを強調して止まないものである。藤村の専門家意識については後述するので、ここでは詳細に立ち入らない。

一方、藤村の特徴的な好尚として、日常生活に密接した手仕事への強い愛着心が挙げられるように思う。例えば、「田舎者のせいだ、自分の生れた家で、物を手造りにする楽しみといふやうなことを教へられたものだから、以前には『緑蔭叢書』の自費出版などを企てたし、原稿紙なども、そんな気持から、自分の家で刷つてゐる。自分で書き、やうな木版を刻らして置いて、それをずっと永く使つてゐる。余程以前には、紙を買つて来て原稿を書いて疲れた時などによく自分で刷つたものであるが、それが又楽しみでもあつた。」と述べている談話「私が筆を執る時」(「文章倶楽部」大10・7)などは、その好個の例であらう。談話「親ご、ろ」(「窓の光」昭3・11)によると、わざわざ私製の原稿用紙を「桜の木で版木を作つて(中略)手刷りに」する習慣は、小諸在住の頃から続いていたわけで、手仕事への愛着心が並大抵ではないことをしのばせる。その他、手仕事に関する事柄として、藤村のエッセイ・小説等にししばしば障子張りの場面が見られる。前記エッセイ「浅草にて」の六月八日の条、『家』(明44・11)の下巻四章、小説「嵐」(「改造」大15・9)など枚挙にいとまが無いほどである。これは、従来文豪のつましい暮らし向きを伝える生活断片として理解されている。^(注10) 確かに筆一本

で生計を維持しなければならなかった生活レベルが反映したものに相違なからう。しかし、「忙がしい手間を見つけて障子の切張をして居る時などは妙に心が落ち着く。」と述べているエッセイ「障子」(『後の新片町より』所収)の表現が、原稿執筆の合間に行う「障子を張る」等の手仕事が「人の心を静かにさせる」と述べた前記「島崎さん」の内容に完全に符合していることに注意すると、上記の原稿用紙の場合と同様に、手仕事への藤村独自の価値意識について示唆していると考えるべきであらう。いずれの場合も、藤村一流の凝り方とか生活のつましさの反映など見なすことは出来まい。つまり、原稿用紙の手刷りや障子張りなどは、著作生活の束の間に行われる些細な身体労働によって、創作活動の緊張が癒されるような意味付けが施されているのである。^(注11) 換言するならば、藤村はクロポトキンの『田園・工場・仕事場』第八章「精神労働と肉体労働」を通じて、人間の本性の発現は、精神と肉体の双方の活動が十全に統合されることによって可能になるという見解に立ち、頭脳労働が身体の仕事から分離し遠ざかっていくことに精神主義の純化があるかのように思い込む錯覚を倒錯した僥倖であると戒め、「手仕事」の意味づけをしきりに強調していると思われるのである。

(四)

新片町時代の藤村に顕著な傾向と云えば、「専門家」を特権化する風潮、専門家意識に潜んでいる弱点について執拗に批判したエッセイが目立っていることである。後年のエッセイ「回想のセザンヌ」「田中卯一郎君処女作集『悩める人々』序」(いずれも前記『飯倉だより』所収)などにおいて、習練によつて培われた技巧によつて専門家が卓越する強みを發揮できると同時に、真の創造性を殺してしまう芸術家気質に陥り

やすいことに警戒の目を向けた発言があることから、藤村固有の一貫した信条と言ふべきかもしれない。しかし、明治四十二年の「ルウソオの『懺悔』中に見出したる自己」「専門家」(『新片町より』所収)「問答」(『時事新報』明42・12・14・15)などにおいて、この時期しきりに繰り返された批判の真意をその背景にまで目を向けて考察しておくべきであらう。

藤村は『新片町より』の「序」の後段部分において、「生き、愛し、死ぬる『生』そのまゝに物を見得るといふ時」に実現されるすぐれた文学を夢想している。「序」の趣旨は、既成の觀念からの束縛を警戒し、自由な囚われぬ精神によつて物の精髓に達することを文学的宿願としてきた藤村の指標的な理念を表明した文章である。このように力強く説かれた「序」に、次のような文章が挿入されている。

専門的知識は、又、兎角人を束縛するものである。例へば、文学を語るにしても、内容奈何とか形式奈何とかの僅かな言葉で概括的に言ひ表はし得るものではないと思ふ。今少し考へ方を自由にしておか、る必要がある。

吾儕は「人」としてこの世に生れて来たものである。ある専門家として生れて来たものではない。文学の道路も先づこゝから出発せねばならぬ。

精緻な知識は、往々にして自由な発想を未然に規制する呪縛力となる危険を秘めている。藤村の言うとおり、既成の概念に制約されずに本質の指定を行う為には、思考の自在さの確保がなによりも肝要になってくるのである。発想の固定化を排し、専門家である前に「人」であることの意義を強調する考え方は、「序」の後段部分の「『生』そのまゝに物を見」よ、という金言へ真つ直ぐに繋がっている。同様に、エッセイ「専

門家」で藤村は次のように繰り返している。「人は専門家たるべく生れて来たものではない。専門を定めるといふことは、多くの場合に、衣食を得るの必要から起る。」生活の糧を得るために不可避な職業従事において、本来「人」であることの自己実現の手段でなければならない選択が、主客を転倒させていることの指摘である。衣食の優先は、自己証明を職能にたけた専門家意識に求めるのを必然とする。時代の趨勢が、様々の階層・職域において専門家という語句に価値付けを強化する状況のなかで、あえて「人」としての自由に固執する生き方を鮮明に打ち出している。

過剰な専門家意識の弊害を鋭くつく論理は、必ずしもクロボトキンとの接点を確定するものではない。しかし、この批判意識に加えて、藤村がシステムとしての「分業」を様々な分野で推進した近代社会が、その余弊を露呈していることを憂慮する人でもあったことによつて動かしがなくなる。それを示唆しているのが、エッセイ「教育の分業法」(『新片町より』所収)と「ルウソオの『懺悔』中に見出したる自己」である。

藤村にまとまつた教育論というほどの文章はない。しかし、小諸義塾で六年間教鞭を執つた経験に裏打ちされた一言言がないわけではない。例えば、明治期後半、女子教育が整備されていく状況を概観しながら、結婚・「家」の問題等、「女の一生」に依然として山積している困難な課題を列挙し、これからの女子教育のあるべき姿、教育に期待する実質的な事柄について提言したエッセイ「女子と修養」(『新片町より』所収)がある。教育の目的は、知的な装飾に止まる死に学問ではなく、物を掴むことの出来る手のような活用力、つまり實際生活の土台に寄与する力の涵養であつて欲しいと要望している。教育の本旨が、生きる力を形成する学問の機会である観点において正論であらう。

藤村は「教育の分業法」で、「今の世は師弟の道が廢れたといふ。人

情が荒んだといふ。これは教育社会によく聞く言葉である。然し、師弟の情誼が乏しくなつたのは、教育其物の罪ではあるまいか。今日の教育の『分業法』が自然に齎した結果ではあるまいか。」と痛論している。藤村が憂慮している「教育社会」とは、「師弟の道」が廢れ「師弟の情誼」が乏しくなつた等の表現から、高等教育の現状を指しているかと判断してよいであろう。教育界が直面している皮肉な現状を、意識の世代的ギャップに原因を求めず、教育システムの中に問題の根があることを指摘しようとした発言である。『世界大百科事典』(一九七二・四 平凡社)の「専門化」の語句の解説によると、分業というシステムは、その導入によって職種を問わず自動的に機能の強化・効率化をもたらし、それに携わる人間を専門家に傾かせる。分業の結果として発生する機能の純化を専門化といい、高度な専門化に対応する分業法の採用は必然であると同時に、画一化・全体への指向性の希薄化・没個性等の問題を惹起させる諸刃の両面を持つていると説明している。エッセイ「教育の分業法」に見える「分業法」の語句が括弧書きで強調されているのは、最新の学問・研究に対応する教育機関の整備、あるいは細分化された教授システムの推進等を批判した書き方と理解するだけでは不十分なのではないか。『明治のことは辞典』(昭61・12 東京堂出版)は、「分業」の語句について、『言海』(明24)の「夫レ夫レ分レテ業ヲ営ムコト。」という語義の外、『辞林』(明44)『大辞典』(明45)の語釈を引き、理財学つまり経済学の用語としての語義を付加している。藤村は教育の本旨が損なわれる制度的欠陥を、アダム・スミスが『諸国民の富』で説いて以来、広く浸透した経済学の用語である「分業法」を意識して書いていると思われるのである。教育社会に顕在化する「人情」「情誼」の荒廃理由を「分業法」の否定面、つまり、教育の分業が高度な学問の教授を可能に

したと同時に、教育が本来指向する人間本位との背離に直面せざるを得ない矛盾に見出しているのである。エッセイ「教育の分業法」は、藤村が時代の推進した「分業」の積極的効用に隠された人間不在の負の問題があることに気付いていたことを示唆しているのである。

「ルウソオの懺悔」中に見出した自己」は、従前から青年藤村に人生上の覚醒を促したルソー体験をめぐってよく引き合いに出されるエッセイである。これも、藤村が「分業法」の否定面を強く意識していたことを証明する資料である。

私がルウソオに就て面白く思ふことは、文学者とか、哲学者とか、あるひは教育家とかの専門家を以て自ら任じなかつたところにある。唯「人」として進んで行つた処にある。あの一生煩悶を続けた所にある。ルウソオは人の一生に革命を起した。その結果として、新しい文学者を生み、教育家を生み、法学者を生んだ。ルウソオは『自由を考へる人』の父であつた。近代の人の卵はこゝに胚胎して居る。この『自由を考へる人』の中には、文学哲学等の専門家ばかりでなく、実に種々な人が生れた。例をいへば、トルストイ、クロポトキンなどの歩いて行つた道は、先づルウソオが拓いたものと思ふ。人が余り分業的の名義に縛られないで、自由に考へ、自由に書き、自由に行ふといふことは、いかにも面白い。この境地に生きる青年が今日の日本にも多く出て来てよからうと思ふ。

ルソーに近代人の根本要件である「自由を考へる人」を発見した周知の一節である。自己確立を既成の価値規範に制約されない自由な精神の活動に求める論理は、当然特定の専門分野に秀でる自己限定を唯一の方向とはしない。ましてや「自由を考へる人」は、「専門家」をもつて自負する選良意識とは無縁であろう。ここで興味深いのは、『新片町より』

の「序」など同一の過剰な専門家意識を批判する文脈に、エッセイ「教育の分業法」と類似の「分業的名義」の語句が新たに付け加えられていることである。ここには「分業」と「専門家」とを不可分の関係で捉えようとする考え方がある。「ルウソオの『懺悔』中に見出したる自己」が、「専門家」批判と「分業的名義」からの自由を説く論理をセットとして述べていることから判断して、藤村が過度の「分業法」と「専門家」の誕生の因果関係を強く意識していたと見て間違いあるまい。『新片町より』の「序」などの一連の「専門家」批判は、経済的効率の原理である分業を教育に適用する弊害を諷したエッセイ「教育の分業法」や、「分業的名義」から自他ともに自由になることを志向するクロボトキンに言及した「ルウソオの『懺悔』中に見出したる自己」と同一の基盤にある問題意識の発現であったのである。同時に、分業制度によつて肉体の労働から切り離されて誕生した専門家が、人間の全体性を喪失していることを鋭く批判したクロボトキン『田園・工場・仕事場』の内容と深く関連していることを証明しているのである。とりわけ、クロボトキンが分業制度の欠陥を痛烈に批判し、人間の全能力が開放されるためには、全ての人に肉体と精神の労働を結合させる「合成教育」が授けられるべきである、と主張した第八章「精神労働と肉体労働」の受容が強く反映しているであろう。そして、『田園・工場・仕事場』読後の感想を集約した「広いところへ出るやうな気がする」という語句は、精神と肉体の活動を創造的に調和させる生活者としての具体的な方途について、夢想を与えて止まなかったことを意味していたと思われる。

(五)

藤村は過度の専門化や分業法を推進する社会一般の風潮に警告を発し

ているが、それは人間不在の否定面への厳しい論断にはなっていない。クロボトキンが資本主義経済の分業メカニズムを糾弾し、それを塗り返るために無政府の共産社会の樹立を説く思想内容とは多大なギャップがあると言わねばならない。より良い社会へ向かう漸進的改良に粘り強く期待を繋ぐヒューマニズムの立場に立つ藤村の関心事は、支配と抑圧の資本主義経済からの解放を理論化した無政府の共産主義に対するストリートな共鳴ではなかったであろう。

つまり、藤村はクロボトキンの『田園・工場・仕事場』と出会うことによつて、ルソー体験の意義を再確認し、まず何者にも束縛を受けない「自由な精神」の必要性をより強固に構築していったと思われる。同時に、専門家である前に「人」であらねばならないという自戒は、柔軟な発想を阻害し真の創造性を殺してしまう芸術家の陥穽を回避せんとする強固な意思を固めることに繋がっている。そして、藤村はクロボトキンに影響を受け、近代社会の様々な側面に浸透している分業的思考法を、人間本位と矛盾する弊害面から批判する論者となった。そのことは、知識人の理想的なあり方について、現実の生活から遊離した孤高の精神主義者として措定することを否定し、全一な人間の理想を精神と肉体の活動が結合された生活の直中において追究して行く文学志向の確立へと連動していったのである。

今後の課題は、藤村の思想形成に影響を与えたクロボトキン受容が、自伝的小説群の一見凡庸な生活者の列伝のような人間造型にどのような繋がるかを、作品の具体的な検討を行うことで明らかにしていかなければならない。

注

1 瀬沼茂樹『評伝島崎藤村』(昭56・10 筑摩書房)、藪楨子『透谷・藤村・一葉』(平3・7 明治書院)

2 『田園・工場・仕事場』の本文は、改訂版(一九二二年刊)の本文によっている磯谷武郎訳『田園・工場・仕事場』(アナキズム叢書クロボトキンⅡ 三書房 一九七〇・一一)を使用した。藤村は第一版の本文で読んだと考えられるが、第一版を訳した佐藤寛次の『農業の調和』(明45・5 成美堂書店)の訳文と照合することによって増補箇所を排除して検討することは可能である。以下『田園・工場・仕事場』の書名・章題名は、磯谷訳に合わせた。なお、本書の内容については、三一書房版に付載された磯谷武郎の「解説『田園・工場・仕事場』について」の他、勝田吉太郎「アナキズム思想とその現代的意義(―無政府共産主義―クロボトキン―)」(『世界の名著』42) 昭42・11 中央公論社) ピルモヴァ著・左近毅訳『クロボトキン伝』(一九九四・一一 法政大学出版局)等を参照した。

3 秋田雨雀編『島崎藤村研究』(昭9・11 楽浪書院)所収。

4 木村は、藤村にクロボトキンの著書を勧められてから、次第に自己の思想と生活の実践を変えていく。木村の前記のエッセイ「三つの本」によると、クロボトキンの本「無政府主義者の道徳」を二十四歳の春から夏にかけて読んだと語っている。木村の生年は明治二十二年であるので、その時期は明治四十五年あるいは大正元年に相当する。

藤村に影響された木村が、上記の年に進んでクロボトキンの「無政府主義者の道徳」を読むようになったとすると、後述するように藤村が『田園・工場・仕事場』の一読を勧めた時期の推定と矛盾しない。

5 同書所収エッセイ「記憶二三(私は何故土の生活を選んだか)」に

「嘗てクロボトキン等の本から深い感銘を受けた頭脳(マシ)の教育と、手仕事教育。それも私はこの田園の環境の中で、子供に相伴はせて行くことにもしたいとも考へてゐる。」と、エッセイ「心の脈搏」に「耕作者は長時間の労働を要せずに、愉快な筋肉労働をすると同時に、知識的労働にも与かり得る閑暇が出来るといふクロボトキン式の見解」と述べられている。これは、藤村が「精神労働と肉体労働」の章を特に注意して読むよう勧めたことも関連する表現である。その他のエッセイから例示すると「クロボトキンのやうな生き方をするのが自然だ。」(『生活の弁』)「我旧師クロボトキン先生」(『田園讃歌』)「クロボトキンの生活の完全なことを指し示された」(『新つれぐ草を』)など、木村にクロボトキンの感化が深く持続されていることを明示する文章が散見する。

6 前掲『クロボトキン伝』によると、雑誌「十九世紀」に連載した自然科学の多岐にわたる評論は、『最近の科学』(一九〇一年)にまとめられている。

7 藤村は、明治三十九年一月二十二日付け神津猛宛て書簡において、友人が『破戒』を自費出版するために印刷所に往来するなど煩雑な準備に忙殺される姿を見て気の毒そうな顔をするのに対して、自分の真意が全く別の所にあることを次のように伝えている。「しかし小生はむしろこれを楽みと致し、書斎以外の学問と思ひ、寒風を衝いて印刷所に到れば、そこにもうつりかはる世の態につき得るところなか／＼に多く候。(中略)あまり書斎にのみ閉籠り、実際の世間に遠かるは文士の弊なれば、小生はかへつて世間に触る、便りとして、むしろこの事業に愉快と勇氣とを覚え申候。」つまり、藤村は、文学者が往々にして書斎の人間に陥り実社会との関係から高踏的に身を処す方

厳しい批判意識を持っていたのである。このような考え方に加えて、小説「幼き日」(『婦人画報』明45・5→大2・4)や「私が筆を執る時」(『文章倶楽部』大10・7)などに述べているように、幼少年時代、生家が衣食の大半を「手づくり」にする生活環境で成長してきた体験とが相待って、クロボトキンの知的労働と肉体労働との分離を厳しく戒めた論理は、滑らかに浸透したのではないか。

8 「私が筆を執る時」には、生来の「手造り」の喜びが、『破戒』の自費出版を企てる遠因となったと言っているだけであり、クロボトキンとの関連性を暗示するものはない。後年、自費出版当時を詳細に回想した「著作と出版」(『読売新聞』大14・5・25→28)も同様である。『破戒』刊行前にクロボトキンの『田園・工場・仕事場』を読了していたかどうか判断に迷うところであるが、『田園・工場・仕事場』について木村に「読を勧めたのが明治四十二年頃であり、『田園・工場・仕事場』の内容と関連する「専門家」批判・「分業法」の弊害についての言及がほぼ同時期であることなどを総合すると、読んだ時期は『破戒』刊行前まで遡ることはないと推定できるであろう。

9 「煙管三本——机に向ふ時の感——」(『文章世界』明40・8)には「原稿紙だけは買った事がなく自ら摺る。(中略)色は小諸時代から、樺、朱、代赭など色々取りかへてみる」と述べられている。

10 吉田精一「『新片町より』漫想」(『藤村全集』第六卷付録月報8 昭42・4 筑摩書房)

11 木村莊太の回想「新片町の家の思い出」(『藤村研究』第一号『島崎藤村全集』第五卷付録 昭23・9 新潮社)は「原稿用紙は手刷りのを当時使っていたようで自分で刷ったりする手仕事心が心を休める、というようなことを聞かされたことがある。」と伝えている。これは、

エッセイ「障子」や雑誌「人間」掲載の「島崎さん」の文章と完全に一致している。

(付記) クロボトキンに関する翻訳書・研究文献については、九州龍谷短期大学教授江頭太助氏から種々懇切な御教示を賜った。深くお礼を申しあげる次第である。